【論文】

不登校児への対処 XII

ー不登校研修の内容と進め方の効果の検討ー

寺田　道夫

（東海学院大学）

はじめに

昨年の 10 月末、文科省は前年度の小中学校における不登校やいじめの発生件数を公表した。特に小学生においていじめの件数が増加したことや、長期にわたり不登校状態にある子どもが多いことが指摘された。それ故、国を挙げての不登校問題への対策が希求されている（文科省,2016b)。

今から 20 年前の 1995 年 4 月から全国の公立学校に急増する不登校問題の解消を目的としたスクールカウンセラー（以後 SC）配置事業が始まった。筆者は同年から 2005 年 6 月まで学校臨床心理士コーディネーターとして県内の SC 配置事業に直接関わった。この間、多くの臨床心理士が SC として学校に配置され、不登校を中心とした様々な事例に関わってきた。もちろん、事業開始当初は、学校側も SC 自身も校内における SC の役割が十分理解できず、不安や戸惑いが多く見られた。しかし、直面する事例をめぐり、次第にお互いが歩み寄りながら不登校事例等に対処できるようになってきた。そして今日では全ての公立小中学校の教育相談体制の中に SC が明確に位置づけられ、ある程度機能するまでになってきた（丸井・寺田,2000)。

その一方で、SC の配置や活用をめぐる課題は山積している。たとえば、都道府県によって SC の確保が容易な地域と困難な地域があること。かつては本業の心理臨床現場で長年経験を積んだ SC が、自身の勤務事情や SC の勤務条件の改定により、関わることが難しくなってきたこと。その結果、臨床心理士資格を取得直後から配置される臨床経験の浅いSCの全体に占める割合が増加していること(藤城・平部・大山・奥村,2012)。

さらに、SC の活用法の検証からみた SC 制度の有効性の評価結果も見逃せない重要課題の一つである（村山・西井,2016)。それを裏付けるかのようにここ数年来配置され始めたスクールソーシャルワーカー（SSW）が脚光を浴びるようになってきた(村山,2015)。

SSW 配置の背景には、不登校の発生要因として家庭及び地域の環境の問題がある。それゆえ。子どもを取り巻く環境に学校及び関係諸機関と連携を図りながら直接介入するといった役割の重要性が一層強調されるようになってきた（文科省,2015,2016a,2016b,2016c)。

この新たな動向に対して SC の中には「自分の職域が犯されるのは」といったことを危惧する者がいないとは言えない。もちろん、SC と SSW に期待される役割は異なっており、両者が共通理解を図りながら協働することで不登校事例に対処できることは言うまでもない。日本においてようやくスタートした相談体制は、イギリスやアメリカでは 70 年以上前から不登校事例の対処に導入されており、両者の果たすべき役割は大きく、先駆者の実践から我が国の SC および SSW が共に学ぶべきことは多い(Johnson,Falstein, and Svendson.,1941;Blagg,1987;寺田,2008)。

学校の教育相談体制を巡る新たな動向を見据えた時、SC として不登校問題に一層機能的に対処するにはどのような知識やスキルを習得すれば良いのだろうか。

もちろん、SC として習得すべき不登校問題や対処にかかわる知識やスキルの活用が、SC の自己満足のみに留まっていてはならない。あくまでそれらが日々、不登校事例に関わっている教師にとっても有効なものでなければ意味はない。それゆえ、SC 等の臨床心理士が校内や他の場で担当する教師対象の不登校に関する研修が、そこに参加した教師にとってどのように認知されているかを検討するが大切であると言える。

今回は、「不登校の対処に関わる実践課題」「不登校研修の概要と参加者の気づき」について筆者の実践例を基に述べることにする。なお、ここで取り上げる事例や研修内容については、本人及び関係者が特定できないよう記述内容等について十分配慮した。

Ⅰ　不登校の対処に関わる実践課題

1．学校における実践課題について

不登校の開始以後、欠席日数が増えるに従い子どもの心や生活の居場所が学校から家庭に移行する事例は多い。家庭に居続けることで、二次的利得や二次的問題の発生など子どもや親、他の家族にも心理面や行動面でさまざまな影響を及ぼす（Klein,1945;Johnson et al.,1941;寺田,2009)。このような利得や問題が派生することで、子どもの登校意欲の低下や学校回避感情が増し、長期に渡り不登校状態に陥り、再登校や学級復帰が難しくなる。

小中学校では、例え長期間の欠席であっても単に「不登校扱い」にされるのみで、進級や中学校への進学には支障は少ない。一方、高校では、欠席日数や欠課時間数の増加がそのまま休学や退学につながる現実がある。

いずれにしても、不登校の開始は、その後の子どもの学習や学校生活だけでなく家庭内においても様々な問題の発

生に結びつくことが多い。それだけに、不登校の前兆を早期に発見し、できる限り学校と家庭が連携しながら早期に対処することの重要性が求められる。

学校がこのような実践課題に向き合うためには、教師自らが不登校に関する基本的事項の理解を深めたり、現実レベルでできることは何かを検討したりすることが大切となる。

それゆえ不登校問題の解消を目的として導入されたSC配置事業が定着した今日も尚、多発する不登校事例の対応に苦慮し、具体的対応やアセスメントの手法を求め、教師が主体的に研修に参加する動きが見られる（寺田,2010-2013）。

2．教師対象の不登校研修のあゆみ―現状と課題―

①不登校問題への関心の高まりと教師研修

日本では、不登校事例が増え始め、次第に着目されてきたのは1960年頃、主に医療機関や相談機関においてであった(佐藤,1959;高木,1962;寺田,2016)。

小・中学校及び高校においても不登校問題が深刻化し始めた1970年代後半以降、不登校の理解や対処に関する教師対象の研修が推進されるようになった。筆者も1990年代以後、学校現場や公的相談機関で不登校事例の相談に応じながら、教師対象の研修を担当してきた（寺田,1993,2012）。

地域の校内研修会の講師として招かれた際は、時間的制約もあり、具体的事例について担任等が概要やそれまでの対応経過を説明した後に筆者が手短にコメントするスタイルが一般的であった。一方、教育センターで担当した研修では、不登校の原因、子どもの状態像の一般的理解、さらに、仮想事例についてのグループによる事例検討会を行うことが主流になった。もちろん、研修内容や研修の進め方に関して、参加した教師の生の声を聞くことは少なかったのではないかと今になって反省する。それゆえ、近年は学校現場における不登校研修を充実することの重要性を実感するようになった。

不登校研修に参加する教師が何を求めているかを事前に把握することは、研修を担当する者にとり、必要不可欠な条件である。もちろん、全て迎合する必要はないが、参加者の動機や期待する研修内容を把握し、参加者の一人一人が一層満足できる研修を行うことは、研修を担当する者の責務であると同時に、日々、不登校事例に直接かかわる教師にとって意義がある。

II　不登校研修の概要と参加者の気づき

1．教師が求める研修内容の構成

図2は平成X年8月に実施された「教員免許更新制度」の下で筆者が担当した「不登校の理解と対処法」というテーマの研修講座に参加した教師（N=64;小学校、中学校、高校等）の参加動機及び期待する研修内容を整理したものである。立場的には、校内教育相談の推進役としての生徒指導主事や教育相談担当者が多くを占め、続いて担任の順となっている。

a.受講動機

・生徒指導、教育相談係、養教として知識を増やしたい
・心の問題を持つ生徒の対応の仕方を知りたい
・過去に不登校事例を経験したことがあったから

といった職務上の動機や「過去に不登校事例に上手く対応できなかったから、今後の対応につなげたい」という動機等が上げられていた。さらに、「今、学校、学級で対応しており、理解の方法や適切な対処法を知りたい」「現場で活かせる内容であり」「まさに教育の課題であるから」という積極的な動機も述べられていた。

b.期待する研修内容、

・理解が容易な内容やケーススタディ形式
・具体的事例や長期の不登校事例の対処法
・不登校の要因及びタイプの違いと対処法
・親の心理
・学校内と専門機関の対処の見分け方

等、不登校の理解とその対応及び具体的な事例への対処法についての要望が大半を占めている。

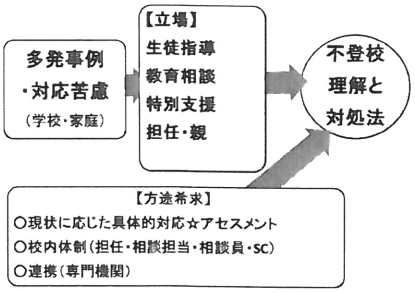


図２　教職員が求める不登校の研修内容（寺田，2010）

参加者の動機や期待する内容を踏まえて、筆者は以下の3項目をプログラムに掲げて終日研修を行った。

(1)不登校問題の現状と課題
(2)不登校の理解
(3)事例の対処法の検討

なお、研修項目ごとに参加者がどのように受け止めたかを把握するため、「興味度」及び「進め方」について5件法（全く＝1、あまり=2、普通＝3、わりと＝4、とても=5）による評価を得た。また、感想や質問等について自由記述を求め、内容を検討し、次年度の研修に反映しようとした。

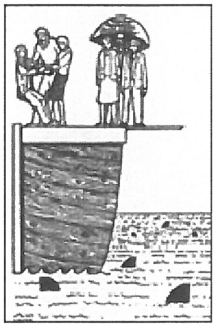
2．研修の概要と実際

ここでは上述した研修プログラムの概要と、各研修終了直後の教師の感想や意見の概要を述べる。

(1)研修①不登校問題の現状と課題

導入：参加者のグループ作りを行うために最初にエンカウンターを導入し、親和的関係を醸成しようとした。

続いて研修の冒頭で、以下の挿絵を示し、そこからイメージされる事項についてグループごとに話し合いすることを求めた。続いてグループごとで話題になったことについて全体の場で交流した。



○登校を嫌がる子ども
○登校させようとする親
○傍観する学校スタッフ
（教師・カウンセラー
SSW）
○学校を恐れる子ども
○親はそれを気づかない

図3　登校をしぶる子どもと親、学校（Blagg,1987）

研修テーマ１　不登校問題の現状と課題

a.学校場面の対応の現状

・一旦、子どもが不登校に陥ると、親も教師もその対応を巡り不安や焦りの気持が増す
・「不登校」という用語は知っているが、目の前の事例に直面すると戸惑いが生じる

b.日本の不登校問題の歩み

・1960年前後に医療や相談機関で着目され始めた
・1980年代に学校場面で教師が注目し始めた
・1990年代に不登校数が急増する
・1990年代以降、国等の施策や研修で次第に教師の不登校事例に対する意識や対応に変化が生じる

しかし、欧米ではすでに19世紀末には教師が子どもの不登校問題に関心を寄せていたことや、1930年代からすでに不登校問題が着目され、それ以後、心理臨床理論に基づき様々な支援や治療が今日まで行われてきたことについても言及した（Blagg,1987）。

c.事例への対処を巡る様々な考え方

・事例は皆異なるため、一般的対応は適用できない
・「再登校」をめぐり心理臨床の専門家の間でも賛否両論があり、戸惑う教師

ここでは、両者のメリット、デメリットを取り上げると共に、多くの心理臨床家が早期再登校の重要性について言及していることにも言及した（Blagg,1987）。

d.不登校の要因

「子どもは何故、不登校に陥るのか」、この問いに対する教師の関心は高い。そこで図4を用いて、個々の事例によって原因やきっかけを特定することがとても難しいことを説明した。さらに、不登校問題が着目され始めた当初は、精神病理や家族機能の問題がクローズアップされた時期もあったこと（Estes, Haylett and Johnson,1956）。特に近年は、文科省も不登校の発生が発達障害や学校要因に起因することを指摘していることについても触れた。

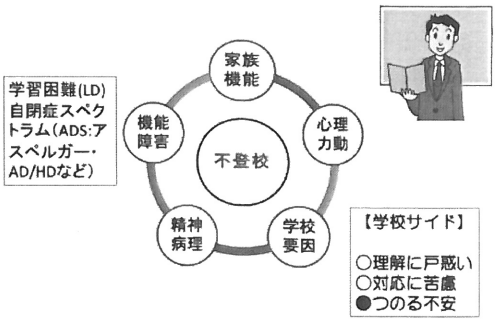


図4　不登校に陥る要因（寺田,2010）

e.不登校発生の推移

文科省の学校基本調査による不登校数の年度ごとの推移を表した図は、不登校問題の深刻さを理解する上でとても重要な資料となる。それに加え、筆者は学年別と学期別の発生件数等の図を提示した（図5･6）。

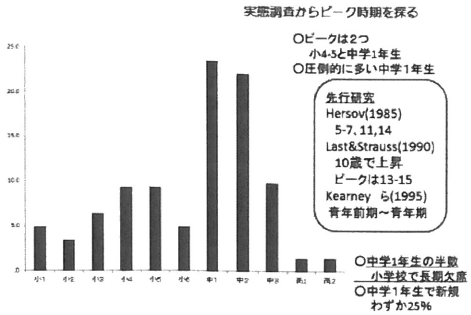


図5　不登校開始の時期（寺田,2009）

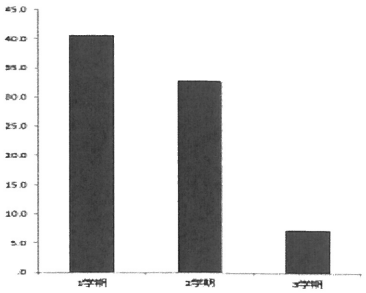


図6　学期ごとにみた不登校の開始(%)（寺田,2009）

これらの図より、中学１年生に不登校の発生が急増することや、1学期は不登校発生の最も多い時期であることが分かる。このことから、年度当初や小学校から中学校への移行期が不登校の早期発見や対処を行う上で重要であることに教師が気づくことができればと願った。

f.「不登校問題」から「不登校＝学校教育課題」への転換

ここでは、不登校問題は、当の子ども自身のその後の社会的、情緒的、職業的発達を危うくする条件となりえること(Hyne&King,2008)。さらに、わが国では不登校の子どもたちがそのまま「引きこもり」となるケースが少なからずあること。また、親自身も登校できない我が子の行く末に戸惑いや不安を持っていることを取り上げた。そして、不登校問題は今や「学校教育の重要な課題であること」を参加者が再認識し、多様な支援や対処をすることの大切さへの気づきを促した。

g.教師、親、子どもの認識のズレ

不登校のきっかけや原因については、図7に示したように学校は家庭の機能不全や子どもの性格特性に帰属する傾向があり、親は子どもの対人的脆弱性によるものと認識しがちであること。一方、子ども自身は学習意欲の喪失や孤立感、いじめや叱責により学校回避感情の増大を上げており、三者の間で認識にズレが見られることを取り上げた。

続いて不登校状態が長期化する理由として、子ども自身に「二次的問題」や「二次的利得」が生じることを具体例を上げて説明した（図8)。

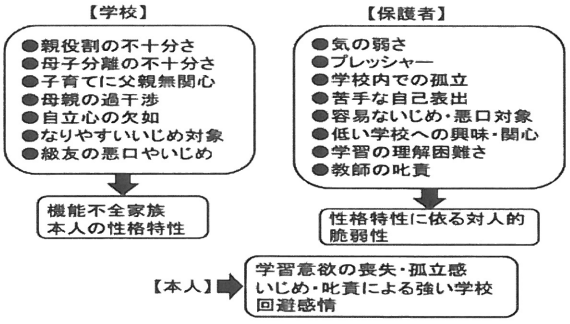


図7 不登校の原因の特定に対する認識

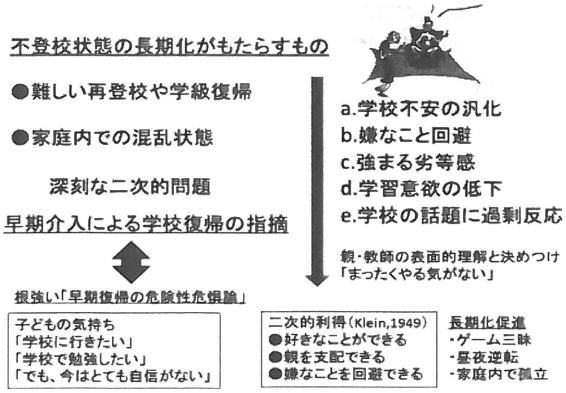


図8　不登校を促進する二次的問題と二次的利得

さらに、これらの問題や利得に拠る不登校状態の長期化を防ぐため、以下の対処事例を紹介した。

事例の概要

5月の連休明けから登校をしぶりはじめた小1女子

○他の地域の幼稚園から地元の小学校に入学した。

○担任はベテラン教師、入学式当日、厳しく指導すると親に公言。

○登校渋り

・5月の連休明けから腹痛などの身体症状を訴え、登校をしぶり始めた。4日目に親が不登校の兆しではと気づき、筆者に相談。

○助言内容

・子どもの状態像について学校と早期に情報を共有

・担任がベテランであるだけに、両親同席で管理職を交えた話し合いの場を設けてもらうこと

・親は子どもが登校をしぶる時、「どうするの？」「学校へ行くの？行かないの？」といった子どもの意向をたずねないこと。子どもは自分で判断することはできず、却って不安や混乱に陥りやすい

・親は車や徒歩で子どもに随伴登校し、学校に到着したら、たとえ子どもが不安になり、「家に帰りたい」と訴えても、その場にしばらく寄り添う（不安は次第に収まることが多く、子どもの訴えに迎合し、帰宅すれば翌日は更に不安は高まりやすい)。

・最後に、子どもの登校渋りは4日目であり、早期に処する。2週間が目途であることも付け加えた。

○対処結果

・翌日、担任と管理職も交えた相談の場が設けられ、親が子どもの登校に関する状態像を説明し、担任や管理職が初めて子どもの不安な様子を知る。

・担任はこれまでの厳格な指導方法を改善することを両親に約束。

○その後

・数日間は親の随伴で登校する。担任の学級内での子どもへの対応に柔らかさが見られるようになり、子どもは次第に学級や担任に馴染み、再発は見られない。

研修１終了直後の参加者の評価

a.内容及び興味度

校種別で研修内容及び興味度について差が見られるかを検討するため一元配置の分散分析を行った結果、校種間に有意な差は見られなかった（研修内容；F=（4,59）=.92,n.s・興味度;F=(4,59）=.70,n.s)。一方、内容の満足度と興味度との間には特別支援学校を除き有意な正の高い相関がみられた（表１参照)。

表1　研修の進め方及び研修内容の興味度の相関（校種別）

		研修の進め方			
	校種	小学校	中学校	高校	特別支援校
興味度	小学校	.70**	−	−	−
	中学校		.65*	−	−
	高校			.83***	−
	特別支援校				0.65

*p<.05,**p<.01,***p<.001

表　研修の進め方及び研修内容の興味度の相関（校種別）

		研修の進め方			
	校種	小学校	中学校	高校	特別支援校
興味度	小学校	.70**	−	−	−
	中学校		.65*	−	−
	高校			.83***	−
	特別支援校				0.65

*p<.05,**p<.01,***p<.001

b.研修内容について

以下のような記述が見られた。

・不登校の現状と課題について、現任校や前任校で数多く見てきた事例に近い内容が聞けた。

・不登校の状態像の解説が大変分かりやすく理解できる。

・状態像の理解については事例を上げながら話してくださり、よくイメージできた。

・初期段階の対応は勉強になった。

・具体的事例から、不登校児の捉え方や対処法のヒントを得ることができた。

なお、参加者自身が過去に関わった事例への対処の振り返りと自戒の念が込められた記述もみられた。

・発達段階における子どもの様子を聞き、昨年教えたこどもの実態そのものだった。

・「不登校の始まりと分かった時点で、教師の熱い思いが子どもを追い詰める」という事例は、自身が経験したことと同じだった。

・朝の登校時に校門での車中の親子のやり取りは、同様の例を親から聞いており、その場で親に助言できなかったことが悔やまれる。

・提示された挿絵から連想されることを考えた際、学校は傘の下に入り、・・確かに自分自身もその状態であると反省させられた。

不登校状態が長期化する背景にある二次的問題及び二次的利得に対する記述も多く、

・二次的利得の問題は、具体例があり理解しやすかった。

・二次的問題の「学校不安の汎化」は共感というか納得。

・無意識的にも二次的利得の状態の家庭が多いと感じた。

・問題や利得が起きる前の対応が必要である。

・二次的問題を防ぐために早期復帰の手立てを打つことの必要性はまさに大切。

・二次的問題や二次的利得が生じると問題が長期化すると改めて感じた。

・二次的問題の解決の難しさから、早期解決、早期復帰の姿勢で臨むことが大切なことを理解した。

・二次的問題で親子の立場が逆転した場合、どう関係が回復するか。

なお、これらの利得や問題が生じることで、不登校が長期化することを納得しながらも、どのように事例に対処すれば良いか分からず、ただ戸惑うことが多い。それゆえ、具体的な対処法を知りたい願う教師が多いことが伺える。

研修テーマ２　不登校の理解

a. 多面的な理解の枠組み

不登校事例を理解するには子どもや親についての様々な情報を得るだけでなく、学校内の不登校要因についても解明することが必要であること。次に、家族内の心理的力動に加え、子どもや親が担任や学級・学校に対していかなる心理的力動がはたらくかを理解することが欠かせないこと。さらに、担任と他の教師及び管理職との間で生まれる心理的力動についても理解を深めることがその後の対処を検討する上で大切となることを述べた。

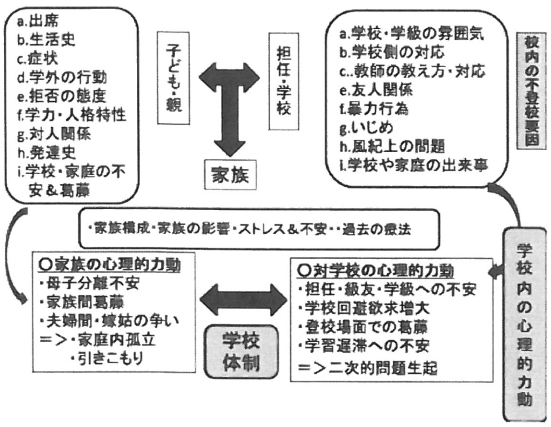


図9　心理的力動のアセスメントの視点（参照Blagg,1987）

b.不登校の理解の枠組み

不登校をどのように理解するかは、その後の事例への対処法を検討する上でとても重要な視点となる。

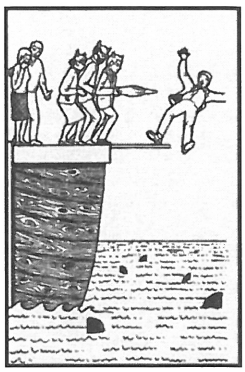


図10 突き落とすスタッフ

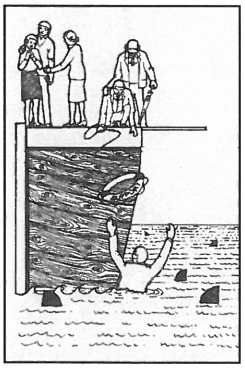


図11　援助するスタッフ

そこで最初に上記の二つの挿絵（Blagg,1987）を提示し、各自が挿絵をどのようにイメージするかをグループ内で交流するように求めた。続いて、ここでは、不登校事例を開始から終結に至る各段階の状態像を取り上げることで、実

際の事例についてそれを基にアセスメントを行えることが可能となることを示唆した。

さらに、吉村(1988)より活用の了解を得た「登校拒否モデル」の具体的項目に加筆した「不登校の各段階に応じた対処モデル」（寺田,2006）を提示した（資料１参照）。

ただし、このモデルを活用する際に留意すべき以下の事項について説明した。

○不登校事例に見られる一般的傾向を示したものである。
○しぶり期から自立期に至る過程を示したに過ぎない。
○各段階について時間的設定はなされていない。
○親面接や教師との面談の場で、先に語られた状態像と類似する記述のみをチェックする。
○子どもだけでなく、親（家族）及び学校についても対応の仕方や言動についてチェックする。

こうしてチェックされた状態像を基に目の前の事例がどの時期に位置づけられるかをアセスメントできる。

研修２終了直後の参加者の評価

不登校の子どもの心の動きについてイメージ化を促すために用いた挿絵については、研修Ⅱ終了直後に20名程が記入しており、以下のようなプラス評価が得られた。

a.挿絵は不登校の理解（親子関係）を促進する

「解説が大変分かりやすい」「家族力動の問題点が表現してありイメージが瞬時にとらえられた」「親子の関係や学校との関係について学ぶことができた」「親子の姿、子どもの姿、諸問題を考え、話し合うという内容はとてもよかった。状況を自分なりに考えることが新しい試みだった」「不登校の背景について考え、理解していく所が大変興味深かった。特に親子関係の様相が的確に描かれており、大変驚いた」「親子関係や問題をうまく表現していておもしろいと思った。一枚の絵からいろいろ考えさせられた」「とても象徴的に表されている」「今日の親子関係をも表しているのはすごいと思った」「親子を取り巻く環境を理解していくことが大変勉強になった」「問題、背景が色々わかるものだと感じた」

なお、「親子関係を考えることの必要性を感じたが、どこまで教師がそこに入るか課題は残る」「欧米の書籍から引用されているが、日本との違いはないか」といった問いかけもあった。

b.段階表の記述内容

・対処の段階表は初めて見たが、本校の生徒にも当てはまる箇所が多くある。
・表は具体的な事例が書かれており、整理されたステップ表が手元に欲しいと思い続けてきた。
・表はとても分かりやすく、だれもが不登校の状態を共通認識できる。
・不登校の進展には5段階があり、子どもの様子が細かく示してあり、ポイントがはっきりしている。
・学校、子ども、親の様子と、望ましい対処をこれだけ適切にまとめた表は初めて見た。ぜひ活用したい。

c.校内の実践事例との関連

・子ども、親の様子や心の状態が分かりやすく、不登校が少しずつ解りかけてきた。
・客観的に事例をみることができ、見通しが持って、実践にも生かせるので参考になる。
・事例に当てはまり、感動した。
・これまでのもやもやしたものが解った。

d.今後の活用について

・状態像が段階的に整理され、理解でき、望ましい対処を知り、これまでの実践の評価や今後の支援に役立つ。
・不登校を「登校できない状態」というように漠然ととらえるのではなく、段階があり、状態像をまず的確に把握し、見通しを持ち、支援することが重要。

このように、学校現場で不登校の各段階に着目し対処することの大切さを実感した参加者が多くを占めた。その結果、この認識に立ち、「今後はこの表に基づきアセスメントをしたい」「表の活用が進めば、対応がより効果的になる。ぜひ学校で職員に広めたい」といった活用意欲の記述も目についた。その一方で「もっと早く知っていれば退学しなかった生徒もいたと思う」といった、過去の対処事例への戸惑いや不安を持ちつつ対応してきたことに自責の念を抱く受講者もいた。

以上の結果から、不登校の段階表の提示は、不登校問題への関心や対応意欲が高い教師にとり、目の前の事例の理解を深め、見通しの上に立つ現実的対処を行う上で、有効であることが示唆された。

研修テーマ3 事例検討

a.事例検討会の進め方

守秘義務:最初に今回扱う事例は、筆者が実際に対処し、すでに終結したものであること。個人が特定されることの無いように記述内容に加除修正を加えることを条件に、本人及び親の同意を得ていることを説明した。

事例検討の進め方：二事例の概要を基に、グループごとで事実確認及び不明箇所を話し合う。なお、全体の場で質問及び応答する。その後、各事例についてどのように対処するかを検討する。

b.事例の概要

学校場面で教師がその対応に苦慮する事例には様々なものがある。それらの中で特に特徴的なものとして、学校に登校することができても、教室に入ることができない子どもの事例と小学校時代から不登校状態にあり、そのまま中学校に入学してきた子どもの事例を取り上げて検討することを求めた。

事例1　教室に入れず、廊下をさまよう中2A男子

概要　中2の6月初め頃から遅刻が増える。学級内では平静さを装っていたが、授業中に頻繁に保健室に行くようになる。やがて、登校しても教室に入ることを拒み、廊下に居続ける。担任は無理矢理にでも教室に入れようとする。このまま放置することもできず、どうしたらよいか、担任としても悩んでいる。

風貌・性格：やせ形で大柄な体格　教室内では付いて回りの行動をし、自己主張はほとんどしない。絵を描くことが好きで、学級でもノートにイラストを描いている。

家庭：寝起きが悪く、登校を嫌がっているのを見かねた父親は暴力を振るってでも無理矢理登校をさせている。母親は子どもと夫との間に立ち、揺れ動いている。

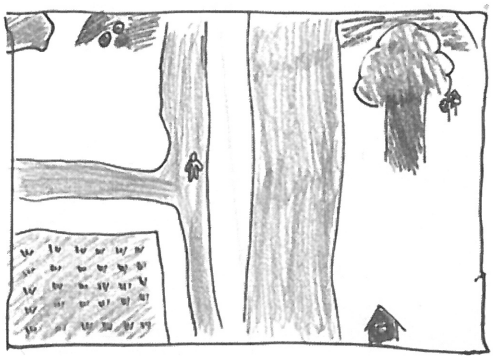


図12　路上にたたずむ子ども（寺田,2006）

事例１については、グループ毎にその対応を検討した後、全体で対処について交流する場を設けた。続いて実際に筆者が行った対処の経過についてAの描画（風景構成法）を用いて、今のAが家庭や学校をどのように認知しているかについて説明を加えた。「子どもは追分で立ち止まっている。人は川によって家に向かう行く手を阻まれている。全体が描けないほどの大きな山は厳格な父親のイメージ。田に規則正しく植えられた苗は、きちんとしなければという強迫的傾向が示唆される。それゆえ、どうすることもできず立ち止まらざるを得ないAの心の状態が伺える」。このような心の状態をとらえた上で、本人の了解を得て、担任や親にAの今の状態について説明し、当面、現状を見守ることを助言した。

事例２では、小学校時代から不登校状態にあり、たとえ再登校しても教室に入ることができず、欠席したり時差登校を繰り返したりしていた。中学入学直後から登校をしぶり始めた事例を取り上げ、グループ毎で事件検討を行った。全体交流の後に筆者の対処法の概要を紹介した。

事例2　4月当初から登校をしぶる中1B男

概要　入学式当日は友人と一緒に登校し、式及び学級指導には出る。しかし、翌朝、登校をしぶる、親からの連絡があり、学校で担任および相談員が親と面接する。
小学校時代にも不登校状態が長く続いており、登校しても教室に入ることに対して強い不安があり、放課後登校をしたり、午前中に登校しても、給食を摂らず、そのまま帰宅したりすることが多かった。

風貌・性格：やせ形で長身の体格。歴史的出来事やパソコン操作に興味や関心があり、休日には友人や担任と地域に石器廣拾いに出かけたり、自宅で簡単なゲームソフトを作ったりして過ごしていた（小6）。

事例への対処のプロセスは、図13のように「場と方法」「ねらい」「関係者」「配慮・着眼事項」の５つの枠組みで順に示した。

さらに、当日の具体的な対処経過、「不安・意欲の階層表」さらにその後の経過についても、図14及び図15と表2を一緒に示した。

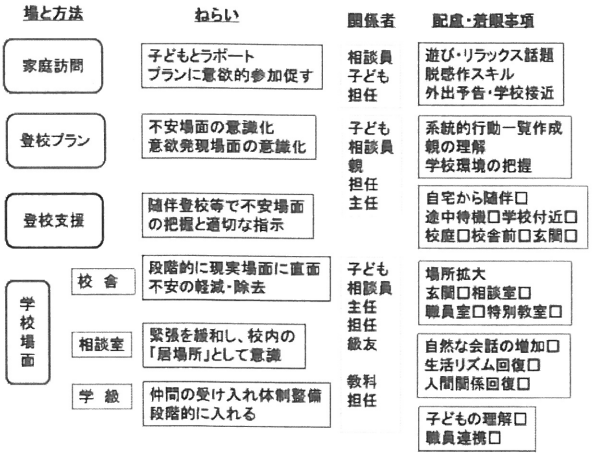


図13　対処のプロセス（寺田,2006）

事例2（中1B）の対処の概要

4月7日
9:10　登校しぶり、親と面接
状態像の把握・・しぶり期
○「行きたいけれど行けない」気持ち尊重（学校・親）
○不安軽減「無理しなくていい」
対処法検討
①出会いの場面設定
・即時、家庭訪問による二次的問題の発生回避
・興味：ゲーム・歴史・科学
10:00　家庭訪問
○玄関先で出会いAが自室に案内
○PCゲームで主導権
○登校意欲と不安の確認
「とても疲れた」
「学校の様子がわからない」
☆「今日、誰も居ない時に来てみたら」
○外で見送り

親より、「Bが5時過ぎに学校へ行く」

校内体制づくり
○学年主任・担任に経過の概要報告
○担任の対応：Cを連れ、校舎案内

5:30　母親と登校
○相談室で出会う
○担任が校舎内の見学対応
親より、「Cが5時過ぎに学校へ行く」

現実への直面を自己決定

	達成目標行動	できる	できない
01	朝、6:50に起きる	☆	
02	食事を家族とする	☆	
03	予定を合わせる		★
04	服装を着がえる	☆	
05	くつをはく	☆	
06	玄関まで行く	☆	
07	外へ出る	☆	
08	友達が来たら会う	☆	
09	友達といっしょに行く		★
10	学校のとちゅうまで行く	☆	
11	学校の近くまで行く	☆	
12	学校の門まで行く	☆	
13	学校のしきちに入る	☆	
14	玄関まで行く	☆	
15	校舎へ入る	☆	
16	保健室・相談室に入る	☆	
17	そこで活動する		★
18	教室へ入る		★
19	一部の授業を受ける		★
20	教室で学習する		★
21	給食を食べる		★
22	給食を教室で食べる		★
23	教室で学習や生活をする		★

できたら☆をつけよう

興味関心
○パソコン
○自然科学
○工作
○ファミコ
○歴史
○工作

よい関係

【解明】
いつでもできる場面と不安が強く、直面できない場面が明らかとなる
【対処】
○できる場面をプラス評価し支援しながら直面を促す
○できない場面はそのまま受容する(親・学校)

図14　不安・意欲の階層表4月8日～12日（寺田,2006）

表2　登校の様子

曜日	登校	曜日	登校	曜日	登校
10 月	○ 車	17 月	○ 車	24 月	○ 歩
11 火	○ 車	18 火	○ 車	25 火	○ 歩
12 水	○ 車	19 水	○ 車	26 水	○ 歩
13 木	○ 車	20 木	○ 車	27 木	○ 歩
14 金	○ 車	21 金	○ 車	28 金	○ 歩

第2相談室
○学習開始
○給食の食器返し
○昼休みに運動場
他の生徒とサッカー

家族ダイナミックスの変化(母親面接より)
M「休んでいた頃は、一人ボツンとしていることが多かった。、最近はきょうだい3人が固まるようになり、何にでも集まってやっています丁度、小学校の時の学校を休む前のように‥それと、下の子が兄を見る目が変わってきて、兄として‥勉強でもよく教えています。違っていることもあるでしょうが、自信につながると思ってそのままにしてあります。」
「主人は仕事で疲れて帰ってきますが、今は子どもが登校しているので表情が違ってきました。‥とても喜んでいます。」

アセスメント①Bの家族に対する認知と、母親の家族全体に対する認知がこのように一致していることが解る。
②それまでの不安定な家族力動(不安・焦り・葛藤・対立等)が次第に安定した状態に向かっていることが伺える。

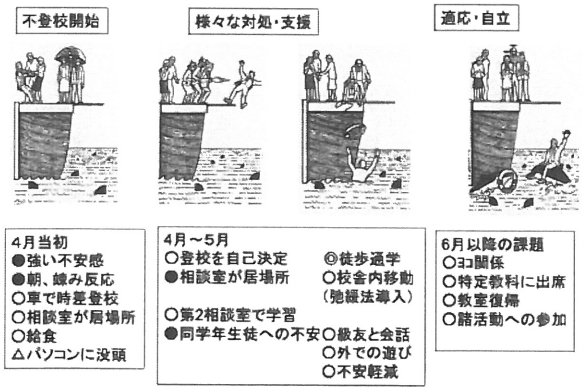


図15　不登校の開始からその後の状態像の推移(寺,2006)

研修３終了後の参加者の評価

a.事例に関わる時に大切なこと

・事例研究を通して、今までいかに表面的なことしか見ていなかったことに気づいた。
・家庭の問題に深く、押し売り的に関わらないようにしないと教師自身が解決できない自分を責めることになる。
・まずは良い関係を築くための出会いを大切にする。関係ができれば子ども自ら不安や意欲を語る。

b.事例内容

・事例を基に考えることができ、2時間という講義もあっという間だった。
・事例を基に具体的な対処の仕方や結果について学び、勉強になった。
・自分の実践と比べながら、今後の支援のあり方を考える良い機会となった。
・実際に身近で同じようなことがあり、考え方や対応について振り返りながら考えることができた。
・事例検討を通して、自分が担任だったらどうするかという視点で考えることができた。
・事例の中の子どもの絵から分析された事項には、その子の内にある心がこんなにも明確に現れるとは驚いた。
・事例は高校生対象ではなく、話し合いは難しく感じた。
・高校の事例がないのが残念。高校は単位認定をする上で、学校側が難しい立場にある。「休んで良い」と本気になって言えない状況で何ができるのか。

c.グループでの検討

・グループ討議の方法が良く、事例は身近で、考えやすかった。いろいろな意見の交流はためになった。
・グループ単位で分析と対処法を討論したが、様々なアプローチがあると感じた。
・先生方と意見交流ができ、多くの考え方に触れることができたことは自分にとり良い刺激となった。
・校種が異なっていたことで、いろいろな状況を知ったり、情報交換ができたりした。
・他の先生方の意見を交えながら対処法を考えることができ、とても有意義だった。学校でも何か問題が起きた際には先生同士でこのように話し合ったら良いと思った。
・事例を話し合う中で、中高の先生方の考えを聞くことで新たな考えを学んだり、自分の考えを話したりすることができ、とても良い（小学校）。
・悩みを共有して対処することの重要性を学んだ。
・グループで交流した後に全体交流することで、多様な見方ができることを知った。
・原因や対処法を話したが、自分と同じ意見もあれば、全く考えつかなかった話も聞くことができ、勉強になった。
・担任個人のみで抱えるのでなく、チームで連携することの大切さを知ることができた。
・事例に基づいた対応を学びたくて本講座を選び、私の思いにぴったりの内容で、大変良かった。

Ⅲ　考察

SC 等が教師対象の不登校に関する研修を行う時に大切なこととして、以下の４つの事項があることが示唆される。

第一は、日々、学校現場で不登校事例に直面している多くの教師は、しぶり期からはじまる様々な状態像の理解や不登校の長期化に伴う問題について具体例に基づいた研修内容の受講を望んでいる。

第二は、不登校の子どもの状態像の理解や対処のための手がかりを得るには、挿絵や不登校の段階表の活用がとてもイメージ化しやすく、学校場面でも教師や親が事例について共通理解を図る上で役立つ。

第三は、事例検討には、不登校の始まりからその後の進展過程および対処例を含めた事例を素材にすることで、自分が今直面している事例を重ね合わせて対処法を検討しようとする意欲が増す。

第四、校種を超えたグループ編成をすることで、校種間で交流が深まると共に、その違いや今、直面している問題の深刻さに気づくことができる。

ある参加者は、研修１及び研修2の各終了直後に次のような内容を記していた。

「現在、登校しぶりの子がいるので、今後どのように対処したら良いか、具体的に教えていただきたい」(研修1)

「まずは子どもをいろいろな面から理解しなければならないと感じたが、分かった上で親や子にどのように対処すれば良いのか」(研修2)

そして、研修3終了後には、「具体的な事例を考え、交流したり、実際の対処の仕方を教えてもらったりする中で、上記の質問の答えが見えてきたように感じます。一人一人がかかえている問題は違いますが、本人や親の思いを共感的に理解することがスタートだと感じました。事例を教えていただきありがとうございました」

このことから、終日研修を通して、学校場面で事例に関わる中で絶えず自問し続けてきた課題について解決する手がかりを自ら得られたものと思われる。

もちろん、課題も多く見られた。その第一に上げられるのは、高校は小中学校と違い、欠席日数や欠課回数が増えれば、そのまま休学や退学を余儀なくせざるを得ないという現実的な問題があること。それだけに、高校の参加者の中には高校に関わる事例についても検討したいという要望もあり、今後、研修を行う際にはぜひ考慮したい。

今回の研修の参加者は研修への動機づけは高いといっても、あくまで「教員免許更新制度」という限られた枠組みの中で行った研修であった。多くの科目から対象者が敢えて選択したに過ぎない。このような研修は、時には半ば強制的参加を強いられる可能性は高い。それだけに、できれば、「不登校の理解と対処」というテーマで、参加希望者を募り、継続的研修会を開設することも必要かと思う。

もちろん、研修内容については、参加者のニーズを考えながら、不登校問題の現況、不登校事例の理解と対処法、さらに多様な事例検討会の導入（校種別、タイプ別、子ども理解、家族支援、継続的事例検討）など、様々な構成が考えられる。

参考・引用文献

Blagg, N. (1987) *School phobia and its treatment*. New York:Croom Helm.

Burke, A. E., & Silverman, W. K. (1987) The prescriptive treatment of school refusal. *Clinical Pychology Review*, *7*, 353-362.

Broadwin, I. T. (1932) A contribution to the study of truancy. *American Journal of Orthopsychiatry*. 2, 253-259.

Estes, H. R., Haylett, C. H., & Jhonson,, A. M. (1956) Separation of anxiety. *American Journal of Psychotherapy*. 10, 6, 682-695.

藤城有美子・平部正樹・大山泰宏・奥村茉莉子 (2012) 第６回「臨床心理士の動向調査」結果の概要　日本臨床心理士会雑誌, 36-41, 日本臨床心理士会.

Heyne,D., & King , N.,.(2005) Treatment of school refusal.In Barret,P. M. & Ollendick, T. H. *Interventions; Prevention and treatment* (Chaper11,243-272).John Woley & Son Ltd.

稲村　博・今井五郎・小泉英二・神保信一・高橋哲夫・中西信男（編）(1990) 学校教育相談理論、実践事例集～登校拒否のすべて, 第一法規出版.

稲村　博 (1994) 不登校の研究. 新曜社.

Johnson. A. M., Falsten. E. I., Szurek. S. A., Svendsen. Margare. (1941) School phobia. *American. Journal. of Orthopsy- -chiatry*, 11(4):702-711.

金子　保 (1992)担任と親とでなおす登校拒否―登校拒否（不登校）の理解と治療教育相談プログラム―田研出版

河合伊六　**(1991)**登校拒否･再登校の指導.ナカニシヤ出版.

Klein,E.(1945) The reluctance to go to school. *The Psychoanalytic Study of the Child.*,1, 263-279.New York:International Universites Press.

丸井澄子・寺田道夫(2000)　学校臨床心理士-現状と課題-岐阜県臨床心理士会（非刊行）.

文部省 (1992)登校拒否（不登校）問題について. 学校不適応対策協力者会議報告.

文科省 (2014) 不登校に関する実態調査―H18 年度不登校生徒に関する追跡調査報告書―不登校に関する調査研究会.

文科省 (2015) 生徒指導提要

文科省 (2016a) 不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)

文科省(2016b) 不登校児童生徒への支援に関する最終報告（案）.
文科省（2016c）2015年度問題行動調査
村山正治(2015) スクールカウンセラー事業にかかわる新しい動向―第42回学校臨床心理士担当理事・コーディネーター全国連絡会議の報告―, 日本臨床心理士会雑誌, 79, 40-41, 日本臨床心理士会.
村山正治・西井克泰 (2016)「チーム学校」で動く新しい教育改革と学校臨床心理士―スクールカウンセラー事業20周年記念シンポジュウム―, 日本臨床心理士会雑誌, 80, 37-38, 日本臨床心理士会.
内外教育　学校基本調査速報. 時事通信社　2007 ～ 2016.
小野　修　(1992) 不登校児から学ぶ―子ども・親・教師の成長のみちすじ―黎明書房.
佐藤修策(1959)　神経症的登校拒否行動の研究―ケース分析による―, 岡山中央児童相談所紀要, 4, 1-15.
佐藤修策（1968）登校拒否児. 国土社.
鷲見たえ子・玉井収介・小林育子(1960) 学校恐怖症の研究, 精神衛生研究, 8, 27-56.
髙木隆郎　(1962)学校恐怖症の家族. 児童青年精医と近接領域, 3, 43.
寺田道夫　(1993) 子どもの登校意欲を促すよい関係づくり～登校拒否指導教員として～東海心理学会第 42 回大会発表論文集, 19 .
寺田道夫（1994a）　教育現場における登校拒否の対処　臨床心理学とその近接領域 9, 34-44.
寺田道夫　(1994b)　登校拒否児への対処―Blagg. N(1987)の学校教育相談への示唆―. 岐阜大学教育学部障害児教育実践センター年報, 121-128.
寺田道夫（1996）登校拒否への対処～相談室の窓から～不破郡教育研究会論文集, 17-46.
寺田道夫　(2006)　不登校児への対処Ⅱ―心理力動的接近―東海学院大学紀要, 26, 155-189.
寺田道夫（2008）不登校児への対処Ⅳ　東海学院大学紀要第 1 号, 107-136.
寺田道夫（2008）不登校児への対処Ⅳ　東海学院大学紀要第 1 号, 107-136.
寺田道夫　(2009)　不登校児への早期対処Ⅵ―学校で今できること―　東海心理臨床研究紀要, 4, 3-11.
寺田道夫　(2010)　不登校児への早期対処Ⅷ―学校で今できることは何か―　東海学院大学紀要, 4, 185-202.
寺田道夫(2010-2013)　講習「不登校事例の理解と対処法―事例検討を中心に―」免許状更新講習会課題認識調査書.
寺田道夫　(2012a)　不登校児への早期対処Ⅸ―学校で不登校問題に初めて対処する時に大切なこと―　東海学院大学紀要, 5, 107-120.
寺田道夫　(2012b)　不登校の子どもの理解と早期対処 5 ―模索期の不登校事例のアセメントと対処の効果の検討―, 日本心理臨床学会第 31 回大会発表論文集, 48.
寺田道夫　(2015)　不登校の子どもの理解と早期対処 8―研修内容の構成と不登校に対する教師意識の質的変容の検討-日本心理臨床学会第 34 回大会口頭発表（シンポジュウム）発表論文集, 152.
寺田道夫（2016）不登校の子どもの理解と早期対処 9―不登校研修における事例検討会の在り方―日本心理臨床学会第 35 回大会発表論文集, 101.
吉村英夫　(1988)　登校拒否の経過モデル　教育心理, 7, 30-35. 日本文化科学社.

資料１　登校拒否の対処の段階表（理解と早期対処のポイント）　　寺田　2006

段階	教職員の対応の様子（担任&他の職員）	しぶり期から自立期までの子どもの様子（学校場面・登校場面・家庭場面）		家庭の親の対応の様子	望ましい学校の対処（担任・全職員・相談係・委員会・ＳＣ）
①しぶり期	a.不登校の前兆に気づかない□ b.欠席理由を届け出のままに受け止める□ c.保健室に出入りする子どもを「怠け」とみる□ d.遅刻や早退することをマイナスにとらえる□ e.行事日だけの登校を甘え・怠けととらえる□ f.「よく来たね」と表面的に励ます□ g.「明日も来なさいね」とことばをかける□ h.登校しても無関心を装う□ i.いつも通りの口調で授業をする□ j.厳しい口調で話す□	【学校場面】 a.遅刻・早退・断続欠席が増える□ b.特定教科の欠席・欠課が増える□ c.保健室に頻繁に出入りする□ d.成績低下や学習意欲が減退する□ e.部活動やクラブ・委員会をさぼる□ f.友達と口をきかず孤立気味になる□ g.集団活動に参加しなくなる□ h.忘れ物やぼんやりすることが増える□	【家庭場面】 a.朝、悪心、腹痛・頭痛を訴える□ b.起床や身支度が遅くなる□ c.「学校嫌、つまらない」と言う□ d.友達批判やいじめられると言う□ e.帰宅すると疲れがひどい□ f.部屋で何もせず、閉じこもる□ g.家族と会話をしなくなる□ h.イライラして落ち着かなくなる□ i. 家族に暴言を吐き、暴力を振るう□	a.身体症状を訴える子を通院させたり相談機関巡りをしたりする□ b.重大と受け止めず、「困った」と思いながらそのまま登校させる□ c.病気（風邪・腹痛・頭痛・生理等）による欠席届をする□ d.家族が気づいても大げさにせずそのままにしておく□ e.登校を渋っても、声をかけ、とりあえず登校させる□	a.不登校の前兆のポイントを知っている□ b.欠席時の様子を聞く（朝・昼・夜&休日）□ c.身体症状以外の状態像から段階を把握する□ d.不登校の前兆と判断できたら家庭と早期に連絡を取り、家庭や学校での様子を交流する□ e.相談部や相談係に早期に伝え、校内での取り組みや親との連携の仕方を検討し実行する□ f.該当の子どもに意図的かつ自然にかかわる□ g.疲れを訴えたら保健室や相談室で即時対応する（担任・保護者と早期連携）□
②混乱期	a.体に異状がないと分かり、甘え、わがままと見なし、強引に登校させるよう努める□ b.保護者に無理矢理、連れてくるよう促す□ c.登校させられない保護者を見下す□ d.自分や級友を訪問させ、登校を約束させる□ e.会えないのに無理に部屋に入り、話す□ f.子どもや保護者の問題と決めつける□ g.責任を感じ、一人で悩んだり抱え込む□ h.親子の混乱状態に気づかず、そのままにする□ i.困ったと思っても対応できないでいる□ j.しばらく様子をようする□	【登校時】 a.前夜に登校の準備をするが起きられない□ b.朝は嫌み反応があるが午後は元気になる□ c.家族や教師に心理的に攻められ苦痛を感じたり、必死に抵抗したりする□ d.親の随伴登校を拒否する□ e.家族と食事や会話をしない□ f.うるさく言われ声高になり暴力を振るう□ g.登校する兄弟に後ろめたさを感じる□ h.パジャマのままでいたり、トイレに入る□ i. 登校の準備を一切しようとしない□	【生活】 j.不規則な起床時刻、昼夜逆転する□ k.登校に自信を無くし劣等感が強まる□ l.周囲に理解されず不満が強まり、言動も荒くなる□ m.人目を気にしたり、部屋の中を何度も動き回ったり、夜寝付かれないなど、さまざまな不安な言動がみられる□ n.感情の起伏が激しくなる□ o.母親や兄弟に攻撃的言動がみられる□ p.家族を避け、部屋に閉じこもる□	a.不登校とわかり動揺し、暴力や条件づきで登校を強いる□ b.「力ずくではだめ」と諦める□ c.理由が分からず不安になる□ d.祖父母や夫に養育態度を攻められ悩む□ e.子育てに自信をなくし苦しむ□ f.外に原因・責任を転嫁し、家庭の問題として考えられない□ g.夫や祖父母への不満が増し、口論になる□ h.転校や心の病を考える□ i.親自身が人目を避け、自分の殻にこもる□	a.登校したくてもできない気持ちがわかる（分かる&解かる）□ b.親の随伴を促したり認めたりする□ c.安心して休むように伝える□ d.家庭との連絡をこまめに行う□ e.電話、手紙、訪問は子どもの状態をふまえて根気強く行う□ f.担任、学年部、相談委員会、全校で共通理解を図り、中心となる人を決め対処する□ g.ＳＣや専門機関と情報交流を行い、対処への助言を得たりきめ細かな連携をしたりする□
③模索期	a.職務の多忙を理由に子どもと関わらない□ b 訪問や電話を子どもに拒否され、戸惑い、そのまま放置する□ c..卒業や進級を理由に再登校を促す□ d.学校便りや「子どもの姿」を形式的に届ける□ e.診断書や休学・退学届けの提出を求める□ f.保護者と定期的な話し合いをしなくなる□ g.他の職員と不登校のことを話題にしない□ h.対応の仕方が分からず悩み、無気力となる□	【生活・家族・対学校】 a.ＴＶやゲーム、漫画や音楽等に没頭する□ b.一見、落ち着いた様子で一日を過ごす□ c.家族との接触や会話が増える□ d.勉強や学校のことが話題になると無口になったり、暴言・暴力を振ったりする□ e.担任や級友の訪問、電話を回避したり受け入れたりする□ f.将来への不安や焦りは強い□	g.日常生活は混乱し、洗面・歯磨きもしない、風呂も入らない□ h.外出を嫌がり、理容にも行かない□ i.好きなことを毎日繰り返し行う□ j.平日は学校のことが気になり疲れる□ k.土日、祭日や夕刻に外出できる□ l. 学年末や学期末、始業時期に不安が高まる□	a.登校を強要しなくなる□ b.将来の不安から勉強や進路変更を勧める□ c.手伝いや訪問者への対応をさせたり自発性に任せたりする□ d.今の行動を理解し見守る□ e.担任に見放されたという不安を持つ□ f.長期欠席となり学校に相談に行きずらくなる□ g.学校へのこだわりは常に心にある□	a.「忘れていない」気持ちを伝える□ b.直接又は級友を通じ連絡をとる□（電話・手紙・訪問） c.良い関係づくりのため本人の興味を理解し、見守り育てようとする気持ちを持つ□ d.登校刺激を控える□ e.ＳＣや相談機関に相談し、助言を求めたり、校内の委員会等でこれまでの対処の経過や今後の対処について検討したりする□
④回復期	a.自宅学習や遊びの様子から登校刺激を早急に与えようとする□ b.家庭では元気なのに、なぜ登校しようとしないのか理解できない□ c.登校を焦り、子どもの気持ちを無視してかかわろうとする□ d.再登校を焦り、前段階に逆戻りさせる□	a.次第に周囲に目を向け活動を始める□（外出・趣味・学習・アルバイトなど） b.起床時刻が早くなり、家事手伝いや体力作りを始める□ c.新聞、ＴＶニュースに関心を持ち、家族と話題にする□ d.一人で買い物や床屋に出かける□	e.親しい級友と一緒に遊ぶようになる□ f.学校のことを話題にして話せる□ g.家族や担任、級友に自分の気持ちを話せるようになる□ h.相手の気持ちを理解したり、話を素直に聞いたりできるようになる□ i.再登校への意欲や意志を表す□	a.子どもなりに成長していると受け止め、自発性を伸ばす機会を増やす□ b.子どもの動きに任せようとする□ c.子どもを強く押し出す力を持つ□ d.意欲が出れば学習は大丈夫と考える□ e.学校を信頼し連絡や相談を積極的にする□	a.学校・家庭・相談員と連絡を密にし、登校刺激のタイミングを検討する□ b.再登校に向け環境チェック等の準備をする□ c.学級や校内の受け入れ方を共通理解する□（温かく・さりげなく・偶発的に・迷わず） d.学習の遅れの心配をたずね、安心して登校できるように配慮する□
⑤自立期	再登校期 a.再登校した子どもに気を遣い、疲れる□ b.特別扱いし、他の子どもの反発を買う□ c.部分登校（時差登校など）・随伴登校に満足できず、完全な登校を求める□ d.再登校した子どもの学校滞在時間を増やそうとする□ e.子どもの学力の遅れを気にする□ f.宿題や係り活動など他の子どもと同じように取り組ませようとする□	【登校・学校場面】 a.再登校し、一見明るく振る舞うが、とても緊張し、周囲の言動や雰囲気を気にする□ b.職員用の玄関から入り、教室に直接入ることに抵抗したり渋ったりする□ c.相談室や保健室なら抵抗なく入る□ d.少数の級友ならかかわることができる□ e.登校した日は多弁になり落ち着かない□ f.相談室や保健室から積極的に外に出る□ g.相談室や保健室で給食を食べる□	【家庭場面】 h.親に言われて登校準備をする□. i.登校した日は家で多弁となる□ j.登校翌日は疲れがひどく欠席する□ k.疲れて早く寝るが朝起きられない□ l.「明日も行くよ」と宣言する□ m.放課後や休日は積極的に外出する□ n.帰宅し学校のことを話題にする□ o.学校に合わせて生活リズムを整える□ p.家族の会話が少しずつ増え始める□	a.再発に不安を持ち神経過敏となる□ b.朝送り出しほっとする毎日が続く□ c.次第に子どもへの信頼感が増す□ d.少しずつ母子分離を心がける□ e.家族間の自然な会話を増やそうと努める□ f.子どもの自己主張に耳を傾ける□ g.外出や外食の機会を増やす□ h.子どもの意志や自己決定を大切にする□ i.再発を恐れ、時には不安になる□ j.担任等に子どもの様子を時々たずねる□	a.大げさに迎えたり特別扱いしない□ b.玄関・職員室&保健室&相談室登校、短時間登校・時差登校・放課後&夕方登校など弾力的登校を認め、評価し、長い目で見守る□ c.担任も保健室や相談室で積極的にかかわる□ d.級友のかかわりの輪を少しずつ広げる□ e.場面をセッティングし次第に活動範囲を広げる工夫をする□(掃除・クラブ・委員会など) f.学習の遅れやつまずきに対し、個別支援や習熟度に応じた学習など指導法を工夫する□
	適応期・日常 a.子どもの気持ちに寄り添いかかわる□ b.気を遣わず話したりかかわったりする□ c.他の子どもと同様に扱う□ d.きめ細かな学習支援に努める□ e.時と場に応じてほめたり叱る□	a.朝の集団登校や友達との登校を行う□ b.児童生徒用の玄関から教室に向かう□ c.緊張せず朝の活動に参加する□ d.授業に出て、積極的に学習する□ e.係り活動やクラブ活動に参加する□ f.休み時間に級友と会話したり遊ぶ□ g.給食を学級で食べる□ h.掃除を級友と一緒に取り組む□ i. 自分の考えや気持ちを級友や担任に話す□ j. 終日、充実感を持ち学校生活をする□	k. 進んで登校の準備をする□ l. 着替えや朝食をすばやくする□ m.家族との自然な会話が増える□ n. 手伝いや遊びを進んでする□ o. 宿題や自主的学習をする□ p. 生活リズムが安定し体調も良い□ q. 自分の感情を家族に伝えられる□ r. 土日以外に友達と外出や活動をする□ s. 進路や生き方に自覚や自信を持つ□ t. 家族との信頼感や一体感が増す□	a.家族の生活リズムが安定する□ b.子どもに思ったことを話す□ c.学校のことを話題にしたり尋ねたりする□ d.学習や進路について親の気持ちを伝える□ e.仕事や地域活動に積極的にかかわる□ f.過去を振り返りプラスに受け止める□ g.学校に対し信頼感・感謝の気持ちを持つ□ h.子どもや配偶者に信頼感・一体感を持つ□ i.同居家族への信頼・感謝の気持ちを持つ□	a.担任を始め全職員で温かく見守る□（声かけ・かかわり・指導や支援の配慮） b.子どもの疲れや再発の兆しをキャッチする□ c.家庭と連絡をこまめにし良さを伝える□ d.学級内の学習や生活、特別活動場面で仲間との取り組みを見守り認め、意欲を発現させる□ e.学級復帰後も６ケ月ほどは継続的にケアを続け、不登校の再発を未然に防ぐ□ f.不登校理解及び早期対処の研修を実施する□ g.より良い集団づくりのためのワーク実施□

（引用・参照：吉村秀雄 1988登校拒否の経過モデル　教育心理　日本文化科学社；Blagg.N,1987　School phobia and its treatment　Routledge

題目

不登校児への対処

副題

不登校研修の内容と進め方の検討

要旨

不登校問題の解消は、日本の学校における最重課題の１つとなっている。特に欠席が長期化した事例に学校が関わることは難しい。しかし、教師が子どもの不登校の前兆に気づき、早期に対処することができれば、子どもの再登校や学級復帰を促すことは容易となる。そのため、SC 等の臨床心理士には、教師が求める研修内容を把握した上で、教師の不登校に関する一般的理解を深めながら、事例への具体的対処法に関わる研修を充実することが希求されている。そこで今回は、実践例を基に不登校研修の内容と進め方の効果について検討した。

Keywords:不登校、理解と対処、教師のための研修

英文

The Treatment of Non-Attendance Children XII

The discussion of the contents of non-attendace trainings and practice

Keywords:Non-attendace, understanding and treatment, trainings for teachers.

Abstruct

One of the most important issues for Japanese schools is to solve the problem of school non-attendance. It is particularly difficult for schools to handle the cases of long-term absence. However, it can be easy to encourage the children to go to school and class again if teachers can notice the sign of children's school non-attendance and take prompt treatments This is why clinical psychologists like school counselor are required to recognize the training contents needed by the teachers, deepen the teachers' general understanding of non-attendance, and enrich the trainings concerned with specific treatments against the cases. Then, on this article, based on the examples of practice, the contents of the trainings to solve the problem of school non-attendance and the effects of the way to proceed with them were discussed.